

大佐倉花輪台遺跡（第2次）

－石の棺は地中深くに－

調査研究員 根本 岳 史

遺跡の立地と周辺の遺跡

大佐倉花輪台遺跡（1）は佐倉市の北東部、現在中央排水路となっている印旛沼の南岸1.0km、沼に突き出した標高30mの台地上に立地している。北側は印西市、東側は酒々井町と接しており、ちょうど行政上の境界部に位置している地域である。過去の調査では中・近世の台地整形区画が検出され、遺跡は当該期に帰属するものと考えられていた。

周辺地域における古墳時代の遺跡を概観すると、同一台地上には大佐倉花輪台1号墳（2）・2号墳（3）も確認されているが、現状ではいずれも中・近世の塚であると考えられている。しかし、谷津を挟んだ対岸では大佐倉作ノ木古墳（4）の他、遺構は不明ながら古墳時代中期の石枕（5）が発見されているため、これらが古墳である可能性は高い。また、遺跡の南側では、箱式石棺が検出された将門桔梗塚古墳（6）をはじめ、将門2号墳（7）、将門根古屋1号墳（8）、鬼塚古墳（9）、狐塚古墳（10）など、同時期の築造と考えられる古墳が複数確認されている。その他、西側に伸びる飯田地区の台地上にも未調査ながら多くの古墳が確認され（11）、古墳群とも呼べる幾つかのまとまりを形成している。

遺跡の概要

調査は畑地の耕作中に石棺が露呈したことに伴い、平成22年9月～10月にかけて実施された。その結果、確認された石棺を主体部に持つ古墳1基と、中・近世の溝状遺構が2条検出された。なお、調査は主体部以外においては確認調査のみが実施され、全体の調査は行われていない。

大佐倉花輪台3号墳

検出された古墳は、推定直径約25mの円丘部と、6m前後の方形部から構成されている。外見上は帆

立貝形を呈しているが、墳形については別項にて詳述する。周溝は円丘部で幅最大3.8m・深さ0.65m、方形部では幅1.7m・深さ0.4mと規模が異なっていた。盛土は畑地だったこともあり、調査時点で既に確認できなかった。主体部は常陸産の絹雲母片岩製の箱式石棺であり、方形部と円丘部の間の括れ部地下に、主軸と直交する形で埋設されていた。石棺は天井石3枚、側石8枚、床石4枚の合計15枚で構成されていたと考えられ、長軸1.84m・短軸0.9m・深さ0.8mを測る。石棺内の副葬品は僅少であったが、土師器・須恵器や鉄鏃の小片が確認されているほか、東端部において被葬者のものと考えられる骨片が出土している。墳丘と相似形に巡る周溝は円丘部が深く、方形部が極端に浅く掘り込まれていた。また、円丘部周溝の北端からは破碎された須恵器の甕と鉄製の刀子が検出された。周溝部にも掘込みが残っていたことから、周溝内埋葬と考えられる。残念ながら主体部に伴う出土遺物が少ないため、年代の決定は困難であるが、墳丘形態や箱式石棺の形状などから、古墳時代後期後葉～末葉（6世紀第4四半期）頃の築造と推定される。

墳形（帆立貝式前方後円墳と造り出し付円墳）

続いて、墳形について検討する。本古墳のように円丘に小型の方形部をもつ形状には、前方部の退化した前方後円墳である「帆立貝式前方後円墳」と円墳に造り出しを付設した「造り出し付円墳」の可能性が考えられる。両者の境界は曖昧であり、混同されている場合が多いが、県内の帆立貝式古墳の分類を行った遊佐和敏氏によれば、方形部の高さ、等高線の形状、陪葬施設の有無等によって判断できるとされている。分類に従って検討を行うと、本古墳は、墳丘が確認できなかったため高さは不明であるが、

先述のとおり周溝の規模が円丘部と方形部で著しく異なっているため、前方後円墳とは判断しにくい。また、同様の墳丘形状と主体部をもつ公津原古墳群の天王・船塚8号墳の例も参考とし、ここでは、本古墳の墳丘形状を「造り出し付円墳」と考えておきたい。

変則的古墳

本古墳のような形態を持つ古墳は、「変則的古墳」あるいは「常総型古墳」と呼ばれ主に6世紀後葉から築造が開始される。当地域に特徴的な形態であるとされ、墳丘を持つ盟主墳との階層差が指摘されている。かつて「変則的古墳」を設定した市毛勲氏は、その特徴として「内部施設が墳丘裾部に位置すること」、「内部施設は通常扁平な板石を用いた箱式石棺であること」、「^{がっそう}合葬（追葬）を普通とすること」、「群集墳を形成していること」、「東関東中央部に分布すること」の5点を挙げている。

内部施設（箱式石棺）

箱式石棺は、箱型石棺や組み合わせ式石棺とも呼ばれ、房総においては群集墳の主体部として6世紀中葉から採用が始まり、7世紀中葉まで継続して使用される。石棺を構築する石材には、常陸産の絹雲母片岩のほか、砂岩や凝灰質砂岩、軟質砂岩などの砂岩系の石が利用され、地域によって使用される石材に相違が見られる。本古墳では、印旛沼周辺地域において主体となる常陸産の絹雲母片岩が使われている。また、使用される床石の枚数が少ないほど古いと考えられ、4枚の石材を用いた本石棺は県内では比較的古相を示している。

墳裾部埋葬

墳裾部における埋葬も、箱式石棺の導入とほぼ同時期に開始されると考えられる。変則的古墳では、円墳は墳裾部に主体部が設けられる例が一般的だが、造り出し付円墳や帆立貝式前方後円墳では括れ部の地下に作られる例も多く、本古墳もこれに該当する。中でも、主体部が主軸と直交するものは、平行するものに先行するとされており、当地域では早い段階から変則的古墳が導入された可能性がある。

印旛地域の変則的古墳と群集墳

変則的古墳は、後期群集墳と呼ばれる小規模な古墳が密集する場所に築造される例が多く、本古墳の周辺部にも同様の古墳が存在する可能性は高い。築造の開始は6世紀中～後葉ごろと考えられ、その後終末期古墳と呼ばれる7世紀中葉段階まで継続してつくられている。印旛地域は栄町龍角寺古墳群や成田市公津原古墳群など、全国でも有数の大規模群集墳が築かれた地域である。その他にも佐倉市大作古墳群や四街道市物井古墳群など、多くの群集墳が確認されている。また、それまでの時期に比べ、集落跡の数も非常に多くなっており、人口そのものが増加したことも推測される。

変則的古墳の祖形と酢屋1号墳・塚廻り4号墳

当地域内における変則的古墳の成立が窺えるものに、栄町に所在する6世紀前葉に築造された龍角寺101号墳が挙げられる。これは墳頂に主体部を持つ二重周溝の円墳を改変し、造り出しを設けたものであり、括れ部に箱式石棺が設けられている。

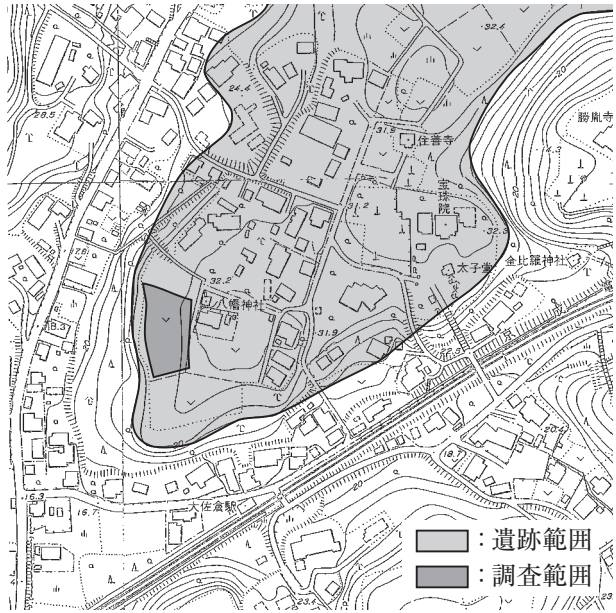
また、変則的古墳の祖形としては、造り出し付円墳の括れ部付近に主体部を持ち、5世紀後半の築造である栃木県大田原市の酢屋^{すや}1号墳が最古とされる。その他、埴輪が^{いじょう}圍繞された6世紀前半の造り出し付円墳である群馬県太田市の塚廻り4号墳は、墳丘が0.5mと低く、低墳丘古墳の系譜として注目される。

まとめ

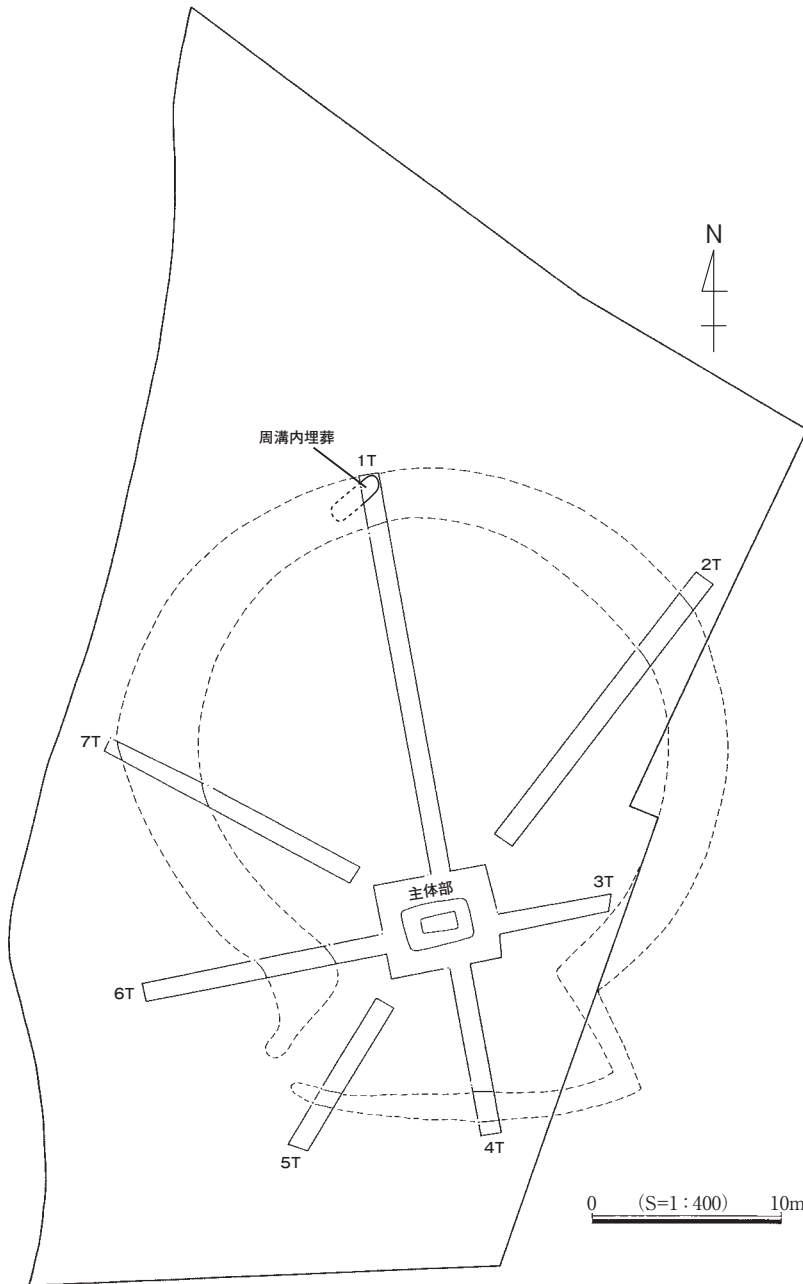
本古墳は、6世紀後葉に築造された造り出し付円墳であり、「変則的古墳」と呼ばれる霞ヶ浦～印旛沼にまたがる地域に特徴的な性格を有している。古墳が築造された時期は、印旛地域において爆発的に古墳・集落が増加し、下総型埴輪や変則的古墳など、独自に発展を遂げた段階である。しかし、その独自性の背後には、後期初頭の群集墳の成立といった、全国的な古墳秩序の解体と再編の影響が存在している。今後は、当地域と中期段階から同一の文化圏を形成した霞ヶ浦周辺地域に加え、変則的古墳の祖形と考えられる古墳をもつ群馬や栃木といった旧毛野地域の豪族たちとの関係性について、更に詳細な検討が必要であると考えられる。



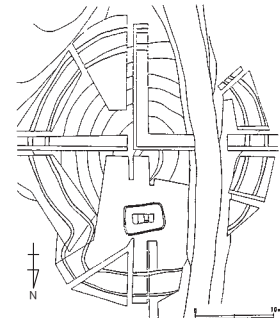
第1図 周辺の遺跡 (S=1:50,000)



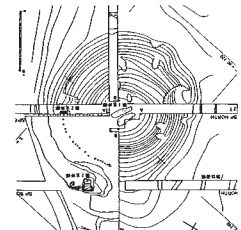
第2図 遺跡の地形 (S=1:5,000)



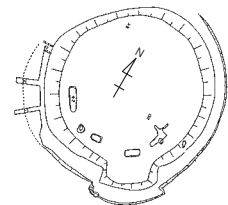
第3図 大佐倉花輪台3号墳 (S=1:400) と関連する古墳 (縮尺不同)



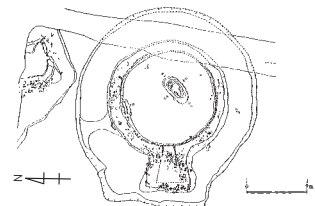
天王・船塚8号墳



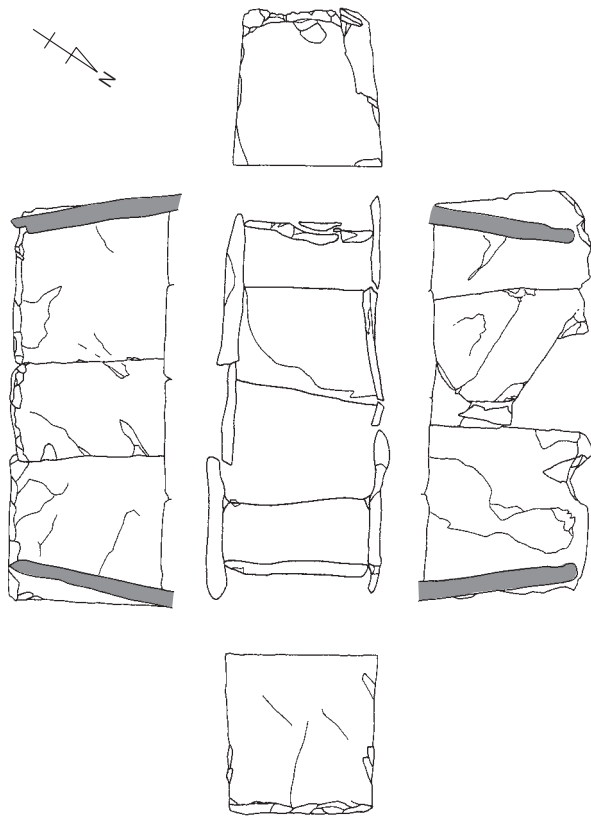
龍角寺101号墳



栃木 酢屋1号墳



群馬 塚廻り4号墳



第4図 主体部箱式石棺 (S=1:40)



主体部検出状況



主体部完掘状況



遺跡から印旛沼を望む



古墳全景



周溝内埋葬 甕出土状況



周溝内埋葬 検出状況